

都市住民の農業・農地に対する評価と期待

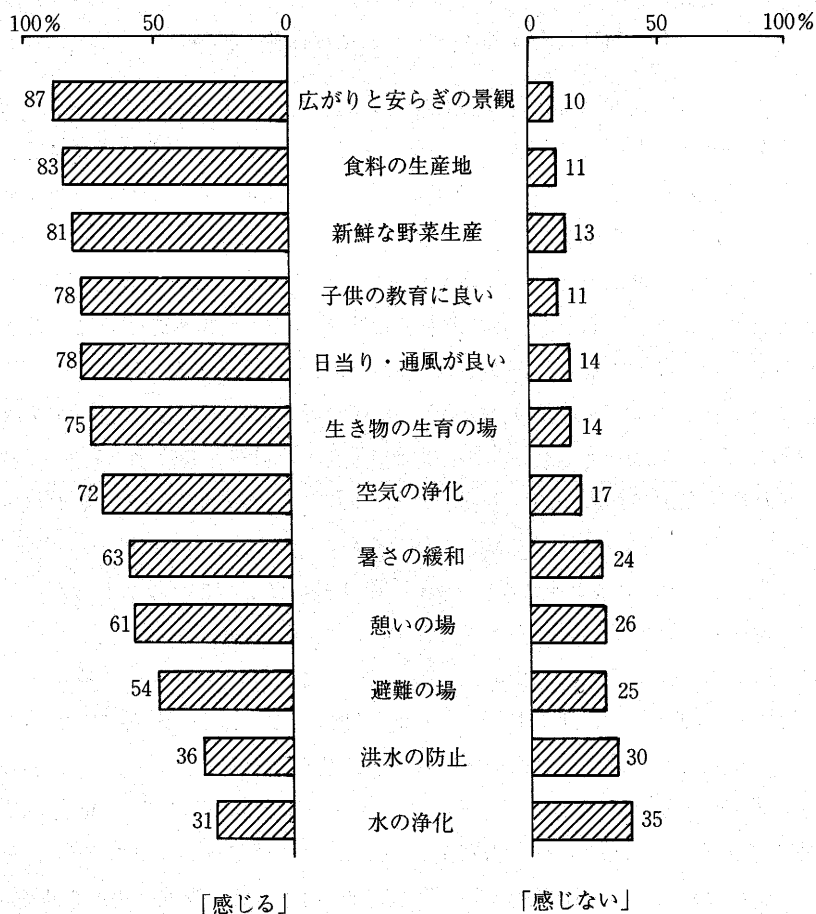
—— 高槻市民を例にとって ——

武 部 隆

1 はじめに

地域住民が、市街化区域内の農地の機能として積極的に評価しているものに、①食料生産機能、②オープンスペース機能、③環境保全機能、それに④子供への教育機能の4つがある。図1は、市街化区域内の農地を地域住民がどのように受け止めているかを、大津市が行ったアン

図1 住民の農地観（よいイメージ）



注：大津市『緑豊かな都市農地と街づくり』昭和62年より転載。

ケート調査結果（昭和62年）にみたものである。「食料の生産地」「新鮮な野菜生産」は①の食料生産機能に、「広がりや安らぎの景観」「憩いの場」「避難の場」は②のオープンスペース機能に、「日当たり・通風がよい」「生き物の生育の場」「空気の浄化」「暑さの緩和」「洪水の防止」「水の浄化」は③の環境保全機能に、そして「子供の教育によい」は④の子供への教育機能に、それぞれ対応している。地域住民は、市街化区域内の農地に、思いのほか肯定的な評価を下しているということができるのである。

そこで、本稿では、高槻市の一般市民に対して実施した「都市農業に関するアンケート調査」結果によりながら、高槻市の一般市民が、農業・農地あるいは農業公園に対して、いかなるイメージを持ち、またいかなる評価を行い、どのような期待を寄せているかを検討することにしよう¹⁾。

1) 平成元年度に実施。配布部数は2,000、回収部数は999である。

2 農地に対するイメージおよび評価と期待

表1は、高槻市の一般市民が、都市部に存在している農地に対して持つイメージや考え方が、性や年齢や農作業の経験などの相違によって、異なっているかどうかを明らかにするために作成したものである。これによると、「住居の形態別」「現在居住地域別」それに「幼少時居住地別」においては、農地に対するイメージや考え方にほとんど差が認められないが、逆に、「農作業の経験別」「年齢別」「性別」それに「職業別」においては、かなり大きな相違の存在することが明らかとなる。また、「周辺農地存在別」では、周辺に農地が存在することによって被る迷惑度において、非常に大きな差異のあることに注目しておく必要がある。

次に、どのような点において農地に対するイメージや考え方の相違が大きいかをみると、「主食である米を生産」「農地宅地混在が景観を悪化」「鳥など自然との接触の場」「新鮮な野菜などを供給」それに「農地の空間が憩いの場」などにおいて、相当差のあることが読み取れる。逆に、「都市農地所有者が羨ましい」「風通しや日当たりをよくする」「いやな臭いが周囲に迷惑」「洪水防止に役立つ」「空気や水をきれいにする」「農地の緑が安らぎとなる」それに「蛙の鳴き声蚊の発生が迷惑」などでは、ほとんど差のないことがよくわかる。

農地に対する以上のようなイメージや考え方の相違に留意しながら、まず、高槻市の一般市民が、農地に対してどのような評価を下し、また何を期待しているかを明確にしておこう。

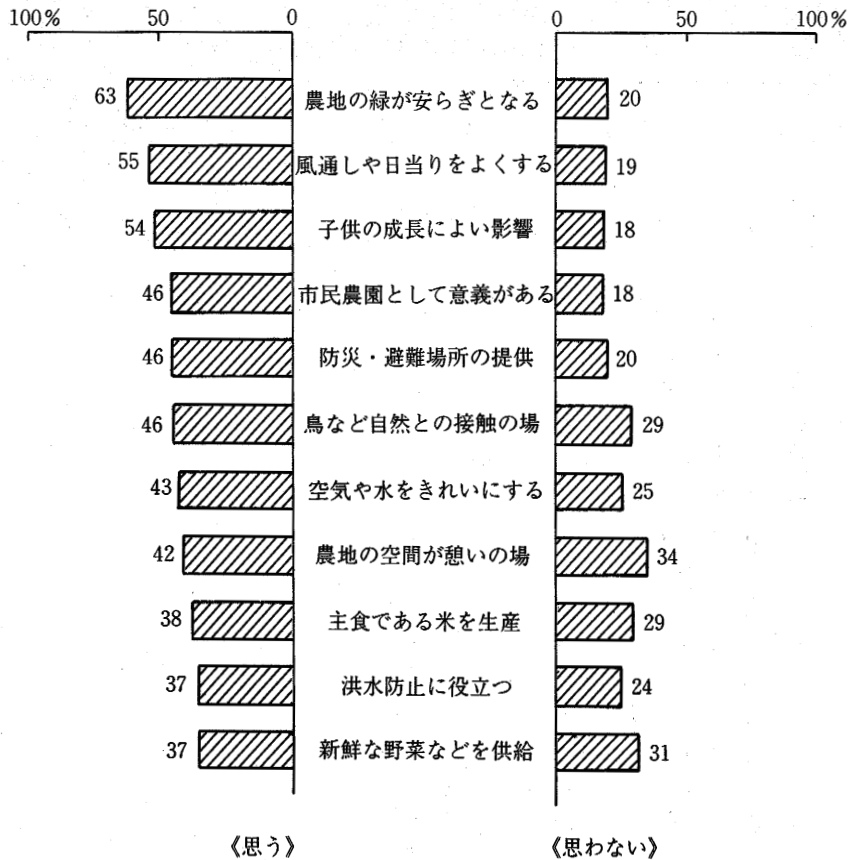
図2と図3は、高槻市の一般市民が都市部に存在する農地に対して持つイメージを、よいイメージと悪いイメージの別にみたものである。よいイメージとしては、50%を超える人が、「農地の緑が安らぎとなる」「風通しや日当たりをよくする」「子供の成長によい影響」をあげており、また、ほぼ半数の人が「市民農園として意義がある」「防災・避難の場所の提供」「鳥など自然との接触の場」を農地に対するよいイメージとして取り上げているのである。

表1 農地に対するイメージや考え方の相違

質 問 項 目 名 (◎=0.5%、○=1%、△=5%で それぞれ有意、また×は非該当を 意味している。)	性 別 A	年 齢 別 B	職 業 別 C	住 居 の 形 態 別 D	幼 少 時 居 住 地 別 E	市 内 居 住 時 期 別 F	現 在 居 住 地 域 別 G	周 辺 農 地 存 在 別 H	農 作 業 の 経 験 別 I
問1① 農地の緑が安らぎとなる	—	—	—	—	—	—	—	△	△
② 農地の空間が憩いの場	△	△	△	—	—	—	△	—	○
③ 主食である米を生産	◎	△	◎	—	△	◎	△	◎	△
④ 新鮮な野菜などを供給	△	◎	—	—	—	△	—	△	△
⑤ 鳥など自然との接触の場	○	△	○	—	—	△	—	—	△
⑥ 子供の成長によい影響	△	○	—	—	△	—	—	—	△
⑦ 風通しや日当りをよくする	—	—	—	—	—	—	—	—	◎
⑧ 空気や水をきれいにする	—	△	—	—	—	—	—	—	○
⑨ 洪水防止に役立つ	—	—	△	—	—	—	△	—	—
⑩ 防災・避難場所の提供	—	○	○	—	—	○	—	—	◎
⑪ 農地宅地混在が景観を悪化	△	○	△	—	—	△	—	△	○
⑫ 農地は有効利用されてない	○	—	—	—	—	△	—	△	—
⑬ 農薬散布が健康に悪影響	—	△	—	—	△	—	—	—	△
⑭ 蛙の鳴き声蚊の発生が迷惑	—	◎	—	—	—	—	—	○	—
⑮ 農業機械の騒音が迷惑	—	—	—	—	△	△	—	◎	○
⑯ トラクターが交通の迷惑	—	△	○	—	—	△	—	◎	—
⑰ いやな臭いが周囲に迷惑	—	—	—	—	—	—	—	◎	—
⑱ 市民農園として意義がある	◎	○	○	—	—	—	—	—	△
⑲ 都市農地は宅地として供給	◎	○	○	—	—	—	—	—	○
⑳ 都市農地所有者が羨ましい	—	△	—	—	—	—	—	—	—
問2 都市農地は残す方がよいか	◎	—	○	—	△	○	—	—	—
問3 居住地周辺に農地があるか	—	△	△	—	—	—	◎	×	◎
3-2 その農地は残す方がよいか	○	—	—	△	△	—	—	—	○
3-3 農地を残す方がよい理由	—	—	—	—	—	—	—	—	—
3-4 残さない方がよい理由	—	—	—	—	—	—	—	—	—
3-5 農地以外の利用としては	—	—	—	—	—	—	—	—	—
問9② 農地について(望ましい高槻市のすがた)	○	—	—	—	○	—	—	—	○
③ 環境について(望ましい高槻市のすがた)	—	—	○	—	—	—	—	—	—

注：アンケート調査結果より作成。◎○△—は、 χ^2 検定の結果を示す。◎において
差異が大きく、○は中くらい、△は差が小さいことを、また—は差異が認められ
ないことを意味する。

図2 高槻市一般市民の農地観（よいイメージ）

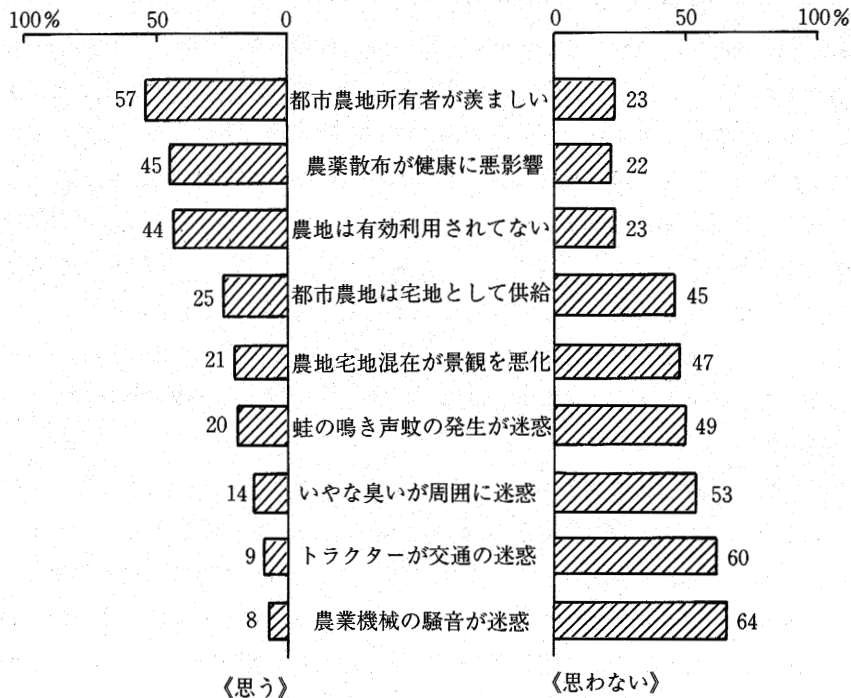


逆に悪いイメージとしては、50%を超える人が、地価のことを考えると「農地所有者が羨ましい」と思っている他は、「農薬散布が健康に悪影響」「農地は有効に利用されていない」と感じている人が40数%いる程度で、農地に対する悪いイメージは、結局、地価問題と土地の有効利用という、この1点に絞られているという感じが強い。

しかし、だからといって、農地をすべて宅地に転換すべきだと考えているのかというと、そうではない。このことは、「都市農地は宅地として供給」した方がよいと思っている人が25%なのに対して、そうは思わない人が45%にも達していること（図3）、また、図には示していないが、多くの高槻市民が、望ましい高槻市のすがたを、「農地と宅地がうまく入り組んだ都市（38%）」「農地と宅地が画然と区分された都市（36%）」、また「緑が多く残された都市（35%）」として夢みていること、それに、「都市農地は残す方がよいか」に対して、農地保全に肯定的な考え方を示す人が極めて多いこと（「農地保全と農地転用を並行すべきだ（41%）」、「農地を宅地にするのは抑えるべきだ（24%）」）、これらのことから明らかとなる。

しかも、高槻市の一般市民が農地に対して持つ以上のようなイメージや考え方は、「住居の

図3 高槻市一般市民の農地観（悪いイメージ）



形態別」にみて差が認められないのである。持ち家の人とそうでない人との間では、農地に対するイメージや考え方が異なってもよさそうである。しかし、アンケート調査の結果は、表1にみたように、「住居の形態別」において、差を作らなかったのである。地価が高騰するのは確かに困ったことである。だが、快適な都市の居住環境のためには、適切な量の農地が必要で、宅地と農地の適度な組み合わせをこそ都市住民は望んでいる、ということができるのである。

ここで、前掲の図2から、高槻市においても、一般市民が、都市部に存在する農地に、①食料生産機能（「主食である米を生産」「新鮮な野菜などを供給」）、②オープンスペース機能（「防災・避難場所の提供」「農地の空間が憩いの場」）、③環境保全機能（「農地の緑が安らぎとなる」「風通しや日当りをよくする」「鳥など自然との接触の場」「空気や水などをきれいにする」「洪水防止に役立つ」）、④子供への教育機能（「子供の成長によい影響」）を認めているが、加えて、⑤レジャー提供（農業学習）機能（「市民農園として意義がある」）にも高い評価を与えていることに注目しておく必要がある。本稿の冒頭で、市街化区域内農地の機能として4つをあげたが、5つめの機能として、レジャー提供機能（農業学習機能）をつけ加えておくのがよいであろう。

次に、①の食料生産機能の中から「主食である米を生産」を、②のオープンスペース機能の

中から「防災・避難場所の提供」を、③の環境保全機能の中から「鳥など自然との接触の場」を選び、それに④の機能である「子供の成長によい影響」と⑤の機能である「市民農園として意義がある」を加えて、これら5つについて、性別や年齢別などの相違を検討しておこう（図は省略し、また表1において、◎印と○印を付したもののみの検討に止めることにする）。

まず、都市部に存在する農地が「主食である米を生産」していると評価しているのは、相対的にみて女性に多く、また居住地周辺に農地のある人に多くなっている。同様に、都市部に存在する農地を「防災・避難場所の提供」として位置づけているのは、55歳以上の人に多く、また現在何らかのかたちで農作業に従事している人に多くなっている。都市部の農地が「鳥など自然との接触の場」となっていると感じているのは女性に多く、「子供の成長によい影響」を及ぼすと考えているのは、45歳未満の若い人たちに多い。また、都市部の農地が「市民農園として意義がある」と感じているのは女性に多く、また、意外にも45歳未満の若い人たちに多くなっているのである。

続いて、居住地の周辺に農地のある人（56%）が、その農地にどのような思いを抱いているかをみてみよう（図省略）。居住地周辺に農地がある人の53%が農地としてそのまま残すのがよいと答えており、それは、男性よりも女性に多く、また現在あるいは過去において何らかのかたちで農作業に従事した経験のある人に多くなっている。農地として残す方がよい理由は、「農地の緑が安らぎとなる（78%）」「鳥など自然との接触の場となる（53%）」「子供の成長によい環境を提供する（51%）」「風通しや日当りをよくしている（51%）」、それに「農地の空間が憩いの場となる（42%）」などの指摘率が高いことから、環境保全機能と子供への教育機能とオープンスペース機能に、とくにその保存の意義を認めているといえることができるであろう。

逆に、農地以外に利用するのがよいとした、居住地周辺に農地がある人の26%は、「都市の農地は宅地に向けるべきだ（56%）」「まとも存在する農地ではない（46%）」「農地は宅地より有効利用されてない（45%）」といった理由で、居住地周辺農地の転用を望んでいる。そして、「公園・緑地などの公共用地（40%）」「低層住宅用地（25%）」などに転用するのがよいと考えているのである（図省略）。

最後に、高槻市の一般市民が、都市部に存在する農地を残す方がよいと考えているかどうかについて検討しておこう。しかし、これについてはすでに触れた。すなわち、「農地を宅地にするのは抑えるべきだ」が24%、「農地保全と農地転用を並行すべきだ」が41%であったのである。これら両者は、農地保全に肯定的な考え方を示していると判断することができるため、実に64%もの人が、何らかのかたちで農地の保全を望んでいるということになる。

そこで、性別、職業別、それに市内居住時期別に、「都市農地は残す方がよいか」をさらに詳しくみてみよう（図は省略し、表1において◎印と○印を付したもののみの検討に止める）。

まず、農地保全に関心が強いのは、女性より男性で、また恒常的勤務に就いている人で、そして昭和30年以降に高槻市に住み始めた人に多くなっている。しかも、彼らの考えは、「農地

保全と農地転用を並行すべきだ」に集約することができ、多くの高槻市の一般市民が望ましい高槻市のすがたを、「農地と宅地がうまく入り組んだ都市（38%）」および「農地と宅地が画然と区分された都市（36%）」として位置づけていることと、みごとに符合しているのである。

地価の高騰は、農地の転用による土地の供給不足に起因するところが大きいと認める一方で、快適な都市の居住環境のためには、適切な量の農地と、適切な農地と宅地の配置が何にも増して重要であると考えている都市住民のすがたが、そこにクローズ・アップされてくるのである。

3 都市農業に対する評価と期待

続いて、都市農業および農業公園を、高槻市の一般市民がどのように評価し、またそれに対して何を期待しているかを明確にしておこう。

表2 都市農業に対する考え方の相違

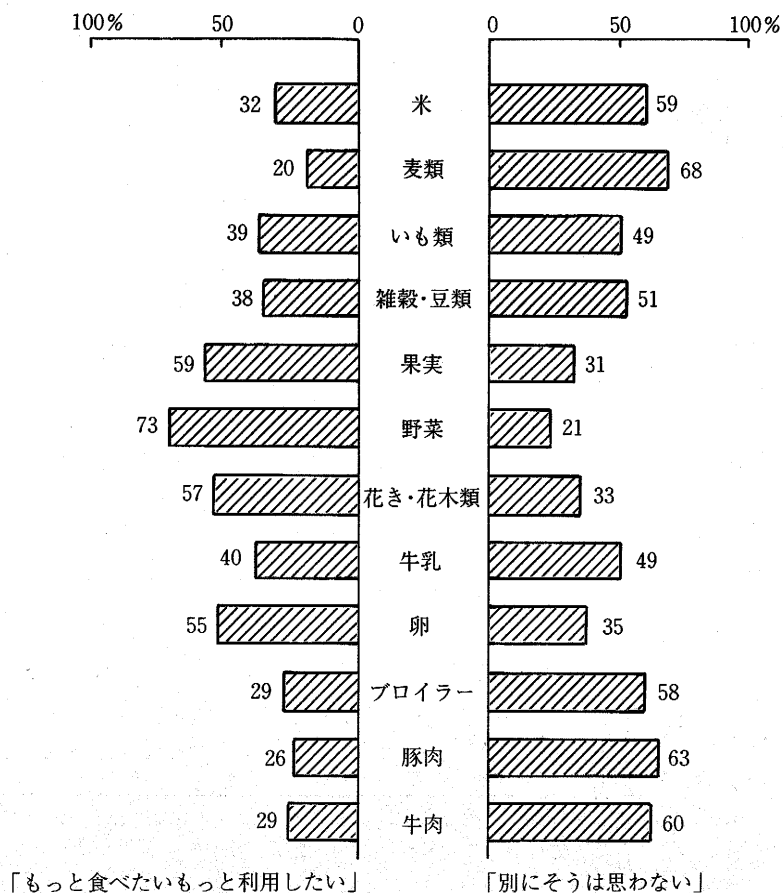
質 問 項 目 名	性 別 A	年 齢 別 B	職 業 別 C	住居の形態 別 D	幼少時居住 地別 E	市内居住時期 別 F	現在居住地域 別 G	周辺農地存在 別 H	農作業の経験 別 I
$\bigcirc = 0.5\%$ 、 $\bigcirc = 1\%$ 、 $\Delta = 5\%$ でそれぞれ有意、また $\times$ は非該当を意味している。									
問8① 米	—	—	—	—	Δ	$\bigcirc$	—	—	—
② 麦類	—	—	—	—	—	—	—	—	—
③ いも類	$\bigcirc$	—	—	—	—	—	—	—	—
④ 雑穀・豆類	Δ	—	—	—	—	—	—	—	—
⑤ 果実	—	—	—	—	—	—	—	—	—
⑥ 野菜	$\bigcirc$	—	—	—	—	—	—	—	—
⑦ 花き・花木類	$\bigcirc$	$\bigcirc$	—	Δ	—	$\bigcirc$	—	—	$\bigcirc$
⑧ 牛乳	Δ	—	—	—	—	—	—	—	—
⑨ 卵	$\bigcirc$	—	Δ	—	—	—	—	—	—
⑩ プロイラー	Δ	—	—	—	—	—	—	—	—
⑪ 豚肉	Δ	—	—	—	—	—	—	—	—
⑫ 牛肉	—	—	—	—	—	—	—	—	—
8-2 地元農産物への期待は何か	—	—	—	—	—	—	—	—	—
8-3 地元農産物取得の方法は	—	$\bigcirc$	—	—	—	—	—	—	$\bigcirc$
問5 貸農園をどう思うか	—	$\bigcirc$	$\bigcirc$	$\bigcirc$	—	$\bigcirc$	—	—	$\bigcirc$
5-2 貸農園を利用しない理由は	—	$\bigcirc$	$\bigcirc$	—	—	Δ	—	—	$\bigcirc$
5-3 貸農園を利用したい理由は	—	$\bigcirc$	—	$\bigcirc$	—	$\bigcirc$	—	—	$\bigcirc$

注：アンケート調査結果より作成。 $\bigcirc \bigcirc \Delta$ —は、 χ^2 検定の結果を示す。 $\bigcirc$ において差異が大きく、 $\bigcirc$ は中くらい、 Δ は差が小さいことを、また—は差異が認められないことを意味する。

まず、都市農業である。ここでは、高槻市の一般市民の地元農産物に対する評価と期待、および貸農園に対する評価と期待について検討しよう。表2は、高槻市の一般市民が地元農産物や貸農園に対して持っている考えが、性や年齢や農作業の経験などの相違によって、異なるものかどうかを明らかにするために作成したものである。同表によると、地元農産物に対する考え方は、概して「性別」による相違が大きく、また貸農園に対する考え方は、「年齢別」「農作業の経験別」「職業別」「市内居住時期別」それに「住居の形態別」において相違が大きくなっている。

さて、図4は、高槻市の一般市民が、地元高槻産の農産物をもっと食べたい（もっと利用したい）と思っているか、あるいはそうでないかを示している。野菜をもっと食べたいと思っている人は73%、果実をもっと食べたいと思っている人は59%、花き・花木類をもっと利用したいと思っている人は57%、それに卵をもっと食べたいと思っている人は55%にも達しているのである。そこで、これら4品目について、性別や年齢別に相違があるかどうかを表2によりみ

図4 地元高槻産農産物をもっと食べたい（もっと利用したい）か



てみると、野菜では「性別」において、花き・花木類では「性別」「年齢別」「市内居住時期別」それに「農作業の経験別」などにおいて、また卵では「性別」などにおいて相違のあることを読み取ることができる。

いま、その相違を検討すると、まず、女性ほど地元産の野菜、花き・花木類、卵を食べたい（利用したい）と思っている。さらに、花き・花木類に関しては、45歳以上の人ほど、また昭和30年から49年の間に高槻市に住み始めた人ほど、そして現在あるいは以前に何らかのかたちで農作業に従事した経験のある人ほど、地元産の花き・花木類を利用したいと考えているのである（図省略）。

それでは、地元農産物をもっと食べたい（もっと利用したい）と答えた人は、地元農産物に何を期待しているのだろうか。図は省略するが、新鮮さ、安さ、安全性などを求めて地元農産物を購入しようとしているのである。また、地元農産物取得の方法としては、「朝市や即売会をしてほしい（69%）」「近所の店でもっと売ってほしい（63%）」といった要望が多いが、年齢や農作業の経験の相違によって、若干その要望に差が出ていることにも注目しておかなければならない。

ところで、貸農園についてはどうであろうか。貸農園を利用したいと考えているグループ（「貸農園を利用しているし利用したい」「利用したことがありまた利用したい」「利用したことはないが利用したい」）と利用したくないと思っているグループ（「現在利用しているが今後はやめたい」「利用したが利用しようとは思わない」「利用したことはないし利用もしない」）に、みごとに二分されるのである。利用したいと考えている人の割合は、意外と中壮年層において多く、また恒常的な勤務の層において多く、昭和50年以降高槻市に住み始めた人において多くなっている（図省略）。

貸農園を利用したい理由としては、「土と親しむことができるから（69%）」「健康保持とストレス解消によいから（57%）」「安全で新鮮な野菜が手に入るから（44%）」、それに「作物を育てる農作業は魅力的だから（39%）」「子供の成長上・教育上よいから（30%）」となっている。貸農園を利用したい理由は、「年齢別」「住居の形態別」「市内居住時期別」それに「農作業の経験別」において異なっており、例えば、45歳未満の若い人は、「土と親しむことができるから」「子供の成長上・教育上よいから」を大きな理由としてあげている（図省略）。

逆に貸農園を利用したくないと思っている人の割合は、55歳以上の高老年層において多く、また昭和29年以前から高槻市に住んでいる人において多くなっている。貸農園を利用したくない理由としては、「年齢別」「職業別」「農作業の経験別」で違っているが、「時間的余裕がないから（45%）」がトップで、続いて「素人がやってもうまいかないから（31%）」となっている。45歳未満の若年層の人にとっては、「時間的余裕がないから」が貸農園を利用しない理由の断然1位であること、また45歳未満の人は貸農園を利用したいと考えている割合がもともと高かったこと、これらのことを考慮すると、今後、貸農園に対する需要が、ますます旺盛になっていくであろうことを予想することができる（図省略）。

以上、地元農産物の購買や貸農園を中心に、高槻市の一般市民が都市農業をどのように評価し、またそれに何を期待しているかを明らかにした。次に、同様のことを農業公園について明確にしておこう。

4 農業公園に対する評価と期待

表3は、高槻市の一般市民の農業公園に対する考え方が、性や年齢や農作業の経験などの相

表3 農業公園に対する考え方の相違

質 問 項 目 名 (◎=0.5%、○=1%、△=5%で それぞれ有意、また×は非該当を 意味している。)	性	年	職	住居の形態	幼少時居住地別	市内居住時期別	現在居住地域別	周辺農地存在別	農作業の経験別
	別A	別B	別C	別D	別E	別F	別G	別H	別I
問6① 高槻花菖蒲園	—	◎	—	◎	—	◎	△	—	◎
② 二料山荘	△	◎	◎	○	—	◎	—	—	—
③ 釣り堀せせらぎの里	○	◎	○	◎	—	◎	—	—	—
④ さつまいも堀り園	◎	◎	△	◎	—	◎	—	—	—
⑤ いちご狩り園	◎	◎	△	○	—	◎	—	—	—
⑥ 神峰山野草らん園	○	◎	△	◎	—	◎	—	—	—
⑦ 高槻森林観光センター	—	◎	—	◎	—	◎	—	—	△
問7① 農産物の収穫が楽しめる	—	◎	—	△	—	△	△	—	—
② 貸農園で収穫が楽しめる	—	—	—	—	—	△	—	—	◎
③ 農業実習で知識を収得	△	○	—	—	—	—	—	—	△
④ 牧場があり家畜に親しめる	—	◎	—	△	—	△	—	—	—
⑤ 公園や広場や散策路がある	—	○	—	—	—	△	—	—	—
⑥ スポーツ施設で楽しめる	—	◎	△	○	—	—	—	—	—
⑦ 魚釣・昆虫採集が楽しめる	—	◎	—	△	—	△	—	—	—
⑧ 動植物が保護されている	—	△	—	—	—	—	—	—	—
⑨ 山菜採り森林浴が楽しめる	—	—	—	—	—	—	—	—	—
⑩ 園芸・盆栽の知識を収得	—	◎	—	○	—	—	—	—	◎
⑪ 農産物の試食を楽しめる	△	△	—	○	—	—	—	—	△
⑫ 宿泊施設が完備している	—	◎	—	△	—	◎	—	—	—
⑬ 農業祭りなどが開催される	—	—	—	—	—	—	—	—	—
⑭ 小中学生が遠足に利用する	—	○	—	△	—	—	—	—	—
7-2 農業公園があればよいか	—	—	—	—	—	—	△	—	—

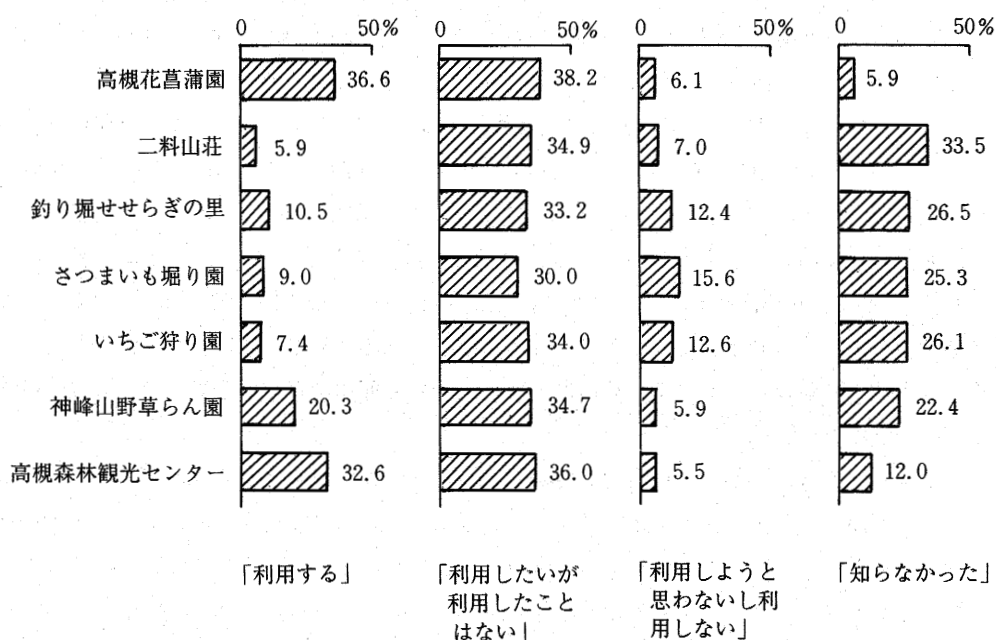
注：アンケート調査結果より作成。◎○△—は、 χ^2 検定の結果を示す。◎において差異が大きく、○は中くらい、△は差が小さいことを、また—は差異が認められないことを意味する。

違によって、どのように異なっているかを示したものである。同表をみると、農業公園に対する考え方は、とくに「年齢別」「住居の形態別」それに「市内居住時期別」において大きく相違していることが明らかである。

まず、既存観光農業施設（「高槻花菖蒲園」「二料山荘」「釣り堀せせらぎの里」「さつまいも掘り園」「いちご狩り園」「神峰山野草らん園」「高槻森林観光センター」）の高槻市民の利用状況を検討することを通して、農業公園に対する高槻市一般市民の評価なりあるいは期待なりを考察しておこう。

図5は、既存の7つの観光農業施設の利用状況である。いま、「利用する」と「利用したいが利用したことはない」の2つを観光農業施設肯定派だとみなすと、高槻花菖蒲園に対しては75%の人が、森林観光センターに対しては69%の人が、そして神峰山野草らん園に対しては55%の人が、肯定的な関心を示しているということになる。しかし、その他の観光農業施設は概して低調で、例えば二料山荘のように、そのような施設を「知らなかった」という人が34%も存在しているなど、施設の知名度を高めるための努力がまず求められているものもある。

図5 高槻市一般市民の既存観光農業施設の利用状況



ここで、これら7つの観光農業施設の利用状況が、性や年齢や農作業の経験などの相違によって、どのように違っているかをみてみよう（図省略）。

まず、高槻花菖蒲園に対する関心は、高齢層ほど、また持ち家の人ほど、古くから高槻市に住んでいる人ほど、そして現在何らかのかたちで農作業に従事している人ほど高くなってい

る。同様に、二料山荘に対する関心は、高年齢層ほど、また主婦や無職の人ほど、持ち家の人ほど、そして古くから高槻市に住んでいる人ほど高い。ただし、現に利用した経験があるかどうかで判断すると事情は若干異なっていて、45～54歳の人に、また自営業の人に利用する度合が高くなっているのが特徴的である。釣り堀せせらぎの里に対しては、関心の高いのは、女性で、高齢者で、主婦や無職の人で、持ち家の人で、そして古くから高槻市に住んでいる人であるが、現に利用したかどうかでみれば、実際の利用度が高いのは、男性、青壮年層、恒常的勤務の人、持ち家の人、そして古くから高槻市に住んでいる人である。

高槻森林観光センターに対する関心は、45～54歳の人ほど、持ち家の人ほど、また古くから高槻市に住んでいる人ほど高くなっている。そして、現に利用したかどうかでみても、同様に、45～54歳の人ほど、持ち家の人ほど、古くから高槻市に住んでいる人ほど、実際の利用度が高いのである。

次いで、高槻市の一般市民が、そもそも農業公園を望んでいるのか、望んでいるとしたらどのような内容を備えた農業公園をイメージし期待しているのか、これらのことについて検討しておこう。

「農業公園があればよいか」に対しては、実に93%もの人が農業公園の存在に肯定的な意向を示している。しかも、「あればよい」と積極的に肯定する人が64%にも達しているのである。それでは、どのような内容の農業公園をイメージとして持っているのだろうか。

図には示していないが、「公園や広場や散策路がある(84%)」「山菜採り森林浴が楽しめる(82%)」「農産物の収穫が楽しめる(79%)」「動植物が保護されている(78%)」「魚釣り・昆虫採集が楽しめる(76%)」それに「小中学生が遠足に利用する(76%)」などの項目において、75%を超える高い支持率となっている。ただし、表3にみるように、「山菜採り森林浴が楽しめる」「動植物が保護されている」それに「農業祭りなどが開催される(57%)」では、性別や年齢別や農作業の経験別などにおいてほとんど差が認められないのに、その他の項目では、多くの項目が年齢別において、また数個の項目が住居の形態別において相当の差を持っていることが明らかである。

農業公園といえば、もともと自然活用型の公共的色彩の強い施設として位置づけられている。しかし、以上のアンケート調査結果によると、高槻市民が頭に描く農業公園とは、自然活用型というよりも、自然を残した空間すなわち都市の中に自然が自然のままに残っているそのような状態こそがとりもおさず農業公園であるとイメージしているようである。

高価な投資をしてスポーツ施設を作ることだけが、また宿泊施設を完備することだけが農業公園の価値を高めるのではない。都市から取り去られ押し出された自然を再び取りもどし、日常の生活の中に自然を呼びもどすこと、そしてこれを可能にしてくれる農業公園をこそ、高槻市の一般市民は切望しているとしなければならないのである。

5 む す び

以上の分析からいえることは、高槻市の農業の将来方向は、多面的な農地利用の方向へと展開していくことであろう。多面的な農地利用とは、農業・農地に従来の食料生産機能（農産物生産機能）のみを期待するのではなく、オープンスペース機能や環境保全機能、それに子供への教育機能やレジャー提供機能をも期待し、農業・農地を積極的に環境財として位置づけていこうとする農地利用のあり方を指している。

高槻市の一般市民が農地に対して持つイメージや考え方は、住居の形態別（持ち家かそうでないかの別）にみて差がなく、地価の高騰は農地の転用による宅地の供給不足に起因するところが大きいと認める一方で、快適な都市の居住環境のためには適切な量の農地が必要で、また宅地と農地の適切な配置も非常に重要である、と考えているところにあった。すなわち、多くの高槻市民が望ましい高槻市のすがたを、「農地と宅地がうまく入り組んだ都市」「農地と宅地が画然と区分された都市」に求めているのである。

高槻市一般市民に対するアンケート調査の結果は、この例からもわかるように、都市部に存在する農業・農地の環境保全機能・オープンスペース機能を高く評価する結果となっており、また農業・農地の市民農園としてのレジャー提供機能に加えて子供への教育機能にも高い評価を与えていたのである。問題は、農家サイドが、環境財としての農業・農地に対する市民サイドのこのような旺盛な需要に応えてくれるかどうかにかかっている。だが、これについても、「緑地地代」（＝都市地代－農業地代）が保証されさえすれば、3割前後にものぼる農家が彼らの農地を環境財として提供してもよいと回答しているのである（図省略）。

したがって、環境財としての多面的な農地利用の方法にはどのようなものが想定されるか、またそのとき、緑地地代を保証する方法としてどのような方策を考慮することができるか、これら2点について、具体的で詳細な詰めが求められているのである。

他方、従来の食料生産機能（農産物生産機能）に関しては、地元高槻産野菜に対する主婦層の強い関心と、地元高槻産の花き・花木類に対する中高年層の関心に注目しておく必要がある。野菜についていうならば、新鮮さと安さを地元産野菜に期待していること、また、取得方法としては、朝市や即売会における購入、それに近所の店での購入に期待が多いことから、これらの期待を満足させる地元産野菜の販売方法がとられなければならないであろう。

また、レジャー提供機能としての貸農園については、貸農園の利用を希望しているのは、意外にも中壮年層において多く、また恒常的勤務の人に多かった。45歳未満の若い人に貸農園を利用したいと希望している割合が高いことは、将来、貸農園に対する需要がますます大きくなっていくことを予想させるものである。貸農園のいっそうの整備拡充が必要となるであろう。

最後に、高槻市民が農業公園に対して持つイメージを、高槻市農業の将来方向を構想する場合にも無視することができないことを指摘しておかなければならない。高槻市一般市民に対するアンケート調査の結果によると、高槻市民が頭に描く農業公園とは、自然活用型というより

は自然そのものであり、自然を残した空間すなわち都市の中に自然が自然のままで残っているそのような状態をこそ農業公園であるとイメージしていたのである。林地や農地をつぶし、人工的な公園を作ることだけが市民の要求に応えることではない。都市部に存在する雑木地や農地を現状のまま保護していくという姿勢も、大切にしていかなければならないのではなかろうか。